



大野岳

【学校教育目標】

ふるさとを愛し、夢に向かってたくましく
挑戦する児童生徒の育成

伊万里市立南波多郷学館

第 2 号

令和7年5月22日発行

文責 校長 多久島 一仁

奮闘し、心輝いた体育大会

5月18日(日)に第8回体育大会が行われました。郷学館の体育大会は様々な学年が一つのまとまりとなって競技を行うものがほとんどで、真剣な中にも楽しめる要素が多いのが特徴です。

たとえば、1・9年生で行った「仲良くピヨピヨレース」では、1年生を乗せたタイヤを9年生が引っ張り、一緒にゴールしました。また、7～9年生が赤団・青団に分かれて点数に差がある竹を取り合う「竹取物語」では、どの竹をだれが何人で取りにいくのか、いろいろと作戦を考えて勝負しました。さらに、「運命的な出会い～アオハル～」では、5・6年生が7・8年生とペアとなり、二人三脚や背中でボール運び、二人で縄跳びなどをしてゴールを目



指しました。1～4年生のダンス「アドベンチャー～待ちに待った1日～」と5～7年生のダンス「Good Time～最高の瞬間～」は、ともに4年生と7年生が先生の力を借りずに振付を下級生に教えて、まとまりのあるダンスを披露しました。8・9年生のソーラン合戦は、チー



ムの勝利のためにこれでもかというくらい腰を落とし、力強く演舞していました。私も去年まで3年間子どもたちと一緒にソーランをやっていただけに、その努力がよく伝わってきて、心が震えました。

全校で行った「全校応援合戦」と「分団対抗リレー」は圧巻でした。「全校応援合戦」では、低学年が取り組めるものを入れ、ユーモアを交えながらも迫力のある応援で、会場を沸かせました。「分団対抗リレー」は1年生からスタートして、アンカーは9年生が務

めたので、人間の成長を目にしているかのようでした。あんな時もあったねえとか、数年後はあんな風に走るのかな、などと思われたのではないのでしょうか。

短い期間だっただけに練習が集中して、きつかったことと思いますが、子どもたちは最後まで一所懸命に取り組んでくれました。また、それぞれのリーダーは教えることの難しさやチームとして取り組むことの大変さも学んだことと思います。そうした努力が感動の体育大会につながったのだと思います。

大きく成長した郷学館の皆さんが、また次の舞台で活躍してくれることを期待しています。

ふるさとに学ぶ

5月2日（金）にふるさと探訪を行いました。今年度は高瀬・水留方面で、5～9年生で行きました。これは、南波多郷学館独自の行事で、ふるさとの自然・文化・歴史について学び、ふるさとを愛し、誇りに思い、将来、自信をもって南波多町を語る人に育てたいということを目的として行っています。講師を務めていただいたのは、3名の方々でした。

見学地は、高瀬区の河川改修、伊勢大神宮、綿津見神社、万寿姫観音、五輪塔、岩坂井堰、馬頭観音、住吉・天神社などでした。

今回の探訪で感じたのは、過去には様々な災害に見舞われていて、その度にいろいろな知恵を絞り、村の人たちが力を合わせて

それを乗り越えてきた歴史があるということでした。1760年代に日照りが続いたときは、雨が降り、作物が育つようと南波多村全体でお金を集めて綿津見神社を建造したということでした。江戸時代には、毎晩遅くまで精米の作業をしていた3人の娘たちが、火の不始末で火事となり、焼け死んでしまったことがあり、その霊を慰めるために火消しの神様として秋葉神社を建立したそうです。また、大蛇のいけにえとなった万寿姫とその弟の菩提を弔うために万寿姫観音が作られたということでした。さらに、江戸時代の初めには大曲地区の水田用水のために岩坂井堰が構築されました。

私たちは先人の方の多くの力の上に今、生活しているのだと実感しました。そうした過去に生きた方々に感謝しながら生きていきたいと思いました。

